眞生

第二卷第八月號

念佛は即ち大乘なり。

□經に「佛は實眼實智たり、法の根本たり、通達の法たり、正法の依たり、亦悉く知見し給ふ」とこれ如来が一切正法の根本、本體であることを示すなり。

□又曰「攝受の正法と攝受正法とは異の攝受正法無し、異の攝受正法無しとは攝受正法の善男子善女子は即ちこれ攝受正法なり」とこれは攝受の正法と攝受の善人とが不二であることを示す、人法不二、機法一體の極妙である。

□又曰、「如来は依にして不求依なり、乃至大乘は佛乘、佛乘は一乘なり、一乘を得る者はアノクタラサンミヤクサンボダイを得、アノクタラサンミヤクサンボダイとは即ち涅槃界なり、涅槃界とは即ちこれ如来の法身なり。」

□「法と僧とは究畢の依にあらず、如来のみ究畢依なり」とこれは如来は不求依にして一切の所依なることを示す。佛乘の外に一乘もなく、又大乘もなし。

□さればこれ念佛は佛乘、即ち一乘究畢の大乘なりこの大乘を得る者は即ち涅槃を得。(念)。

りよ活生きなり光

目次

- 光なき生活より
- 人格主義的浄土教土屋 觀道
- 如來に催されて 小幡 空悅
- 懺悔錄(續) 演 阿彌
- 借金してゐる心持 中野 尠子

弱い子は泣いておどす
坐蒲園の上で吠えてる犬は強そうに弱
吠えてる間丈け強そうに思へるから
其の一番弱さが外へ透けてる時だ
信仰振つた事を言てる間が一番信に遠ざかつてゐる

□ イエスや法然が要る内は駄目だ
要らぬ様になつた時
眞のイエスと法然とが見えて来る
その時は自分が法然やイエスになつてゐるのだ

泣いてる時は其實悲しくない
泣いてる時は其の音は妙味が無い
泣いてる時は其の音は妙味が無い
泣いてる時は其の音は妙味が無い
泣いてる時は其の音は妙味が無い

これこそ他人の爲めにしてゐるのだと云ふ間も
實は自分の爲めに爲てゐるのだ
それを全然自己の爲めと云ふ事なしに
利他道をやらせよと云ふのなら、それは諛だ
それが最大利他の如來行である

▽一日中の女中の仕事をよく見てみると、御飯炊きとお洗濯、子守とお掃除、其間
走りに使ひ返す丈である。亦此れと大差がない、一家の主人と云はるゝ人の生
活を一家の主婦の生活の一部を見よ、専門的にやつてゐるとか云ふのに過ぎぬ。譬へば労働を
して見ると、事務を執るとか、教育に與つてゐるとか、其やつてゐる時間が長くて仕
事が單一だと云ふ以上には違ひはない。
▽そして皆が少し仕事の間、切れ間に暇が出来たとか夜になつて休める時が出来たとか云
ふと天にも昇つた様に、無算段してゐる。避暑が出来るとか、一晩芝居が見れるとか云
ある。其の間は厭や仕事に決めてゐるから、任方が無いやろか、否や爲らぬと喰へぬ
から、其の間は厭や仕事に決めてゐるから、任方が無いやろか、否や爲らぬと喰へぬ
だ。と云ふても、其の間は厭や仕事に決めてゐるから、任方が無いやろか、否や爲らぬと喰へぬ
を消して行く位は、其の間は厭や仕事に決めてゐるから、任方が無いやろか、否や爲らぬと喰へぬ
▽眞に満足と感謝と希望とを以て一時間を費す事が一日に何度ある、いや斯くして一
日を歡喜の裡に暮らし得る人が眞に何人あるか、生れて來たから死ぬ迄止むなく
仕かして眞に人生に張合ひを齎らす事は出来ぬか。今の一瞬を眞に力強く充實せし
める事は出来ぬか。

▽我々が俺の汗で儲けたと威張る一錢も其實惠まれたものである。我々が俺の物だと
誇る財産も妻も子も自分自身の一錢も其實惠まれたものである。我々が俺の物だと
である。借りてゐるとは言へ此等一切の物を率ひて、大自然が我に爲した様な愛と
佛道とを實現せやうとする果せよと如來は内に囁き給ふ。
▽今惠まれた佛の聲に指し示されて、其菩薩行を經濟道の上にも人間道の上にも實現せ
やうとするのである。そこに悦びと望みと力とがある。宗教の道は遠くて庶い。(尠子)

眞生

人格主義的淨土教 (一)

土屋觀道

私共の眼には淨土教ほど完全に近い宗教はないと思へるに世の中の或る人々には淨土教ほど詰らない宗教はないかのやうにさへ思はれてゐるといふことは果して如何なる理由によるのであらうか、殊に夫が無識階級や非人格的人々に依てしか思はれるといふことならまだしも、其の多くが前途有望なる青年若は已に相當の有識階級の人々に依てしかく誤解せらるゝといふことは吾人の最も遺憾とするところである。

乍然、何が故にかくも世人の誤解を招くに到つたのであるかといへばそこには確かにそれ相當の理由があるに違ひはない。而して夫れは未だ眞實の淨土教を充分に知らない所から來たものであつて、之に就いては世の識者といひ若は青年有識の人々が未だ宗教殊に此の淨土教なるものに對する充分の理解なり趣味なりを感ずるほどの知識がなくて、徒らに世間の誤まられたる迷信的淨土教ともいふべき所謂眞實の淨土教ならざる墮落佛教を見ての淺見なる批判に過ぎないものである。乍然眞實の淨土教はそんなに淺劣愚妄なる迷信的宗教にあらずして、正しく人類理想の最も高き人格の宗教であるのである。

一體私共の信するところに依れば本來宗教なるものは人格的のものである。而して中にも最も其の人格的なるものは我が淨土教なりと信ずるものである。元來佛教の目的は、全く自己佛性の開顯であつて

各々各自の佛性を完成する人格中心の宗教である。而して中にも我が淨土教の教へこそは其の最も尤なるものである。然るに此の人格を基礎とせる佛教殊にその淨土教がともすれば之に反せるかの如き形となり又之を信ずる人々も或は之を信せざる人々もこの一點に對しては何等自覺するところなきが如きは吾人のどこまでも之を革正せなければ止まない所である。

されば今私は此の方面よりして淨土教の眞髓を明にせんが爲めに人格主義的淨土教と題して此の問題に直入して見たいと思ふ。然に、世には宗教を以て人格主義なりとせぬものもあり、又之を必要とするも救済にのみ重きを置いて人格の問題を第二にあかうとするものもある。而て、尙一口に人格主義といつても果して如何なる人格をその人格として吾人の理想に見るべきかは甲乙必ずしも其の説を同じくしない場合もあれば最も私共の注意すべき所である。加之、吾人が淨土教を以つて人格主義であるといつても其の人格が如何なる内容を包含せるものなりやといふことを説かなければ果して私共に満足することのできる人格であるか否やといふことは更らに大なる問題であらう。然れば淨土教に於ける人格主義とは如何なる内容を包含せるものであらうか、夫は淨土教そのものゝ本質及び目的方法等にまで研究せなければならぬものである。然るに斯の如き問題はあまりに宏大無邊に渡り到底是等の筆紙の盡くし得るところではない。乍然全々之を抜きにしては決して之を知り得べきことでもなければ唯だ最善の努力をつくして其の根本だけでも説いて見たいと思ふ。乍然此の一小雜誌に於て其の全分の努力を盡す外に仕方がないとは。もとより許すべきことでもないから只その許す範圍に於て其の全分の努力を盡す外に仕方がない、豫めこのことを讀者も恕していただきたい。

夫に就て、凡そ宗教といふものが主として聖なる問題を取扱ふものであつて、眞善美の根本規範となるべきものこそ宗教であるといふことは一般の人々も已に異存のない所であらう。而して最も進歩した宗教がこの聖の世界へ一切の人類を向上せしむるといふ點に於ても等しく宗教の必要を是認する人々の一致するところであらう。然乍ら其の聖なる世界とは如何なる世界であるか、一口に眞善美の規範中心であるといふものゝ其の規範の世界はいづこにあるか、又眞、善、美とは如何なるものを云ふのであるかとは更らに大なる問題である。而して此の大なる問題が私共の智情意の三面に渡つて幾分か捕へられ更らに之を進めて宇宙と人生との關係に思い至つて其の人生の眞を求め、善を求め、美を求め來る時ここには人類の理想として即ち永劫の生命と無限向上の天地とが輝き、此の理想の天地としてそこに神の世界、即ち如來の世界がある。而して此の世界を一つの實在として信仰の中心となし、かゝる神の生活如來の生活をして又自からの生活と志すところそこに至眞、至美、至善の生活が展開する。聖なる世界聖なる生活とは此の信仰を中心とした人類理想の生活をいふのである。而して此の世に於ける人生の生活は果してしかく眞實の理想の全顯せられた世界であらうか、否その全顯の有無はともかくも少くともかゝる理想の實現を今土に實現せんとして日夜に努力するところそれが即ち佛教の理想であり、かゝる理想の體現者を名けて覺者いひ或は佛陀と名け、之に達するを佛教の理想とする。されば佛教の最高目的は此土に於ける人類の理想の生活の實現であつて、知情意圓滿の人格完成に外ならぬものである。而かも此の人格たるや實に宇宙の大道に融合し、一切人類と同體にして、萬物一如、神人合一の生ける人格の生活である。眞善美聖の完成者、即ち佛陀の自覺に到れば我等は單なる人類の一員たるのみなら

ず。直に宇宙理想の體現者として人格完成の人となる。三身四智十力四無畏十八不共法の佛陀世尊は私共理想生活の中心である。されば佛教の理想は、之を哲學的にながむれば即ち哲人の生活であり、宗教的にながむれば即ち神人の生活である。こゝに於て哲學と宗教とは融合し、一切の科學も藝術も道德も決して分離するものではない。

乍然、斯の如きの生活が如何にして私共に與へられるであらうか、そこには道德の宗教化と宗教の道德化とがあり、宗教の哲學化と哲學の宗教化とが關連して、佛教信仰の綿々たる體係があり、之を一概に論じ去ることは出来ないが佛教が人格中心の宗教であるといふことは終始一貫して變らない所である。然にもかゝはらずともすれば今日の佛教が殆ど普通人類の生活を離れて、特種部落的寺院僧侶の占有となり、最も人格的であるべき佛教徒が反て非人格無修養の行動に墮するといふことはかへすも殘淺のきはみである。然るに我が淨土教に於て殊にこの傾向の著しいと云ふことは更らに意外千萬といはねばならぬ。而して之に對する世間の誤解は教理そのものに對する誤解と信者そのものに對する誤解の二つから來るのである。乍然この淨土教が少くとも佛教の一種であり、其の佛教の根本目的が人格の完成にある限り、又淨土教が人格中心であるべきは勿論である。然るに若し淨土教にして此の人格の根本を離るゝものならばそれは決して佛教といはるべきものではない、而してよしそれが佛教といはれてもそれは唯名目を佛教に借りた一つの外道の迷信といはねばならぬ。而して、この意味に於ける淨土教は果して眞實の宗教であらうか、即ち人格主義的淨土教であらうかとは吾人のどこまでも研究せなければならぬ所であらう。而して吾人はこの世人の淨土教に對する批難を耳にするにつけても更らに之を以つ

て眞の佛教なり眞の人格主義的淨土教なりとして之等の批難に答へねばならぬことを感ずるものである。而して之と共に尙一言せざるを得ざるものは我が淨土教を以つて如來の大悲の救濟なりとの言葉の中にかくれて、自らの修養もなさず、又つくすべき社會への責任も無視して而も佛教徒たらんとするが如き人々のあるに至つては飽くまで其の誤まれる彼の立場を反省せしめて一日も早く速かに眞實正態の淨土教に歸一せんことを望んで止まないものである。さればとて私共は之が爲めに最も尊き淨土教の妙諦を忘れよといふのではない。それは如何なる愚かなるものも、又如何に罪ふかき悪人も等しく如來の御前には上なき如來の一子であり、等しく如來の慈愛に救はれて等正覺の理想人たることかできるといふことである。之は最も世人の誤解しやすい所であると共に之が又淨土教に無くてはならない最も大切な所であつて、それが亦人格主義的如來の大悲を離れないものである。

然れば淨土教ならざる淨土教以外の佛教即ち聖道門と淨土教との相違は何處にあるかと云ふにそれは佛教そのもの、目的にあるにあらずして結局その成佛の方法にある。而して其の方法や自力と他力との相違である。

換言すれば此土に於て自ら修行して佛となるか、或は彼土即ち彌陀の淨土に往生して佛となるか、所謂聖道門に於ては成佛の方法が此の土に於ける自力の修行を中心として正覺を得やうとし、之に反して、淨土門に於ては自己の力の無力なることを信じて自力の成佛を斷念し彼の彌陀に救はれて往生の後に成佛するといふにある。而してこの淨土教が他の人々の多くの批難を受けるといふことも主としてこゝに起因する。而して、之を難する側からいへば凡そ吾人の行爲といふものは自らなすべからざることをなさ

ず、自ら爲すべきことを爲し、進んでは一切の衆生として悉く救濟するといふことが即ち佛陀の行爲であり即ち人類の理想である。然るに自らは何等の善行もなさず、又自ら進んで何等解脱の修行もせずして彌陀の淨土に生まれ、而も千辛萬苦の修行の人にも勝りて直に佛果菩提を證得するといふことは其の理としてもありうべきこととなく又かゝる卑しき考へは決して人格ある人々の願ふべき所のものでもない、故に斯の如きの宗教はもとより宗教としてとるにも足らず之はたゞ一種の釋迦の方便教に外ならず、さなくば佛教本來の根本思想から遠く離れた一種の邪教に外ならぬとするのである。

乍然、今私共が聖道自力の法門を捨て、他力淨土の法門を選ぶといふことはそんなに底級な非人格的のものではない、恐くはこれ未だ眞實淨土の法門に一度も眼を注がない人々の誤りに過ぎぬであらう。否少くとも我々の信する所に依ればたゞ聖道門的眞實の修行者もその行爲にして其心に自己の機根を反省することの強きものならばやがてはどうしても此の淨土門に歸らなければならぬものではないかと思ふのである。何者我が眞實の淨土教の成立が全く此の順序方法に依つて初めて開けて來たものであるからである。

然れば私共が淨土教を願ふといふことは如何なる理由によるのであるか、而も如何なる人々が眞に淨土に往生をとげんとするかこの一點こそ更に私共の自他共に考究すべき問題である。而して私共が彌陀の淨土を願ふことは決して自らの責任を忌避して徒に之を貪るが爲めの願ひではない、寧ろ一刻も早く此の土に於ける吾人の理想を此土に實現せんが爲めにこそ、暫く彌陀の淨土に往生して如來の上なき靈化を蒙むるためである。されば自らの責務を忌避するところではない、寧ろ進んで自ら之を完ふせんと欲

する人々に於てこそ心より淨土往生をも願ふところのものであるといはねばならぬ。唯悲いことには我等凡愚の身の日夜に行ふその行爲の一として己が本心に一致せず、自力聖道の修行に於て一として堪え忍ぶこと能はざるが故に暫く此土を去つて彌陀淨土にも往生せんとするのである。乍然其の實寸毫も此土を捨て、永劫に彌陀の淨土に居るものではないのであつて決して之を以つて非人格的行爲なりといふべきものではない。加之これを如來の本願より眺め來る時、そこには上なき如來大悲の慈光の輝くのを見るのである。而して之を衆生の本心より眺むるもそこには無限の人類の理想が輝き殆んど自力修行の問題に行きつまつた一切の衆生が如來の慈光を中心としてこゝに復活するの姿を見る。之私共が聖道自力の法門の後には自ら他力淨土の法門の來るべきことを豫知すると共に更らに進んでは釋尊一代の説法も要するにこの大乘究竟の淨土開宣に外ならないと感ずる以所である。乍然かくいへばとて私共は從來の淨土教徒が分けたる如く釋迦の教説を聖淨の二門に俊別すべきかは少々疑問とするところがあつて、若し私をして其の信ずる所を言はしむれば聖淨不二とさへ言たいところがある。けれどもこゝまで私をして考へせしむるに至つたことはもとより先哲の聖淨分別の宗教々義の賜でもあるが然乍ら今や一切の宗教は聖淨二門の分別にあらずして、人格主義的淨土教の外眞の宗教はないと信ずるものである。されば吾人の理想としては聖道自力の法門は暫く如來大悲の假設門に過ぎずして他力淨土の法門こそは大乘一實の眞門なりとする所以である。何者、凡そ佛教に於ける生死解脱の方法は通じて戒定慧の三學にある。而して之に大小顯密の三學があるといふも、此の三學の中何れが私共の力に相應するものがあらう。恐らくは他力念佛の如來中心の生活を離れては決してこの三學も成就せられるものではない。尤も口徒に三

學を稱へ、形六度を行するの姿はあらうがされど一度私共の本心に於てこの他力念佛の靈光を受けずしていつこに六度萬行の中心を定めんとするか、一度人生の理想を尋究して眞面目に自己の本心行動を反省すれば、幾人か如來他力の本願を仰がずして自力聖道の生活に堪えうるか、口こそ即身成佛と云い、是心是佛といふものも、靜かに翻つて自己自身の佛作佛行を思量すべきである。

果して幾何か人類の理想を自他と共に實現したことであらう。唯彌陀といふ特種の淨土教の名目にこそ依らざれ恐くは如何なる宗教と雖も、如來の加彼力即ち如來の大悲の根本々願の神力を信せずして幾何の大業をか爲し得るものぞ。

乍然、今は暫く夫れ等の問題を別として純淨土教の所説に従い且又自らの行動を反省せんに、そこには湧然として淨土眞實の大光が吾人の心境に髣髴たるを禁ずることが出來ないのを覺ゆる。而てこの問題は聖道門の自力修行の實際の方面を研究し實行すると共に他力淨土の易行念佛を修することによつて愈々その兩者の深き相關の妙境を感得することができるのである。

乍然、今は只表題の一點に向つて其の論法をすゝめる事にして、他力淨土の法門が決して非人格的宗教でないのみならず、寧ろ眞實人生の人格的宗教であることを示せばよい。而て吾人が淨土教を願ふ所以は何處にあるか、又、之が何故に人格的眞實の宗教であるかとは吾人の目下の急務とするところである。(七、十八)。

如來に催されて

小幡空悦

□ 三昧發得は見佛を以て證としてあるのですが、佛を見たから見佛したと云はるべきではない、此事は法然上人當時にも随分問題であつた。上人の詞にも「近來の行人觀法をなす事勿れ、佛像を觀すれ共運慶康慶が造りたる佛ほどだにも觀じあらはすべからず、極樂の莊嚴を觀ずれ共櫻梅桃李の花果程も觀じあらばさん事難かるべし」と。多くの見佛したと云てる人の言行を見ると御自分免許の發得屋が多い。

□ 人に見て貰ふ宗教ではない、人の見て居られる佛と私の見てゐる佛とは違ふ。見佛に就て一例を擧げて云ふなら——私の知人の家内で二年前に五重にもついた篤信家がある。私がある話の序に私には佛様が見えますと云つたら其人は非常に喜んで

で歸宅し其後數日を経て再び來られ、妾もあれから宅へ歸て日々佛前で念佛して居ましたら妾にも佛様が見えましたと云はれた、私は噫つまらぬ事を云はなんだら良かつたと其時思ひました。兎角人間は名人過ぎて名人斗りになるので困ります。

□ 劍道にも氣合の一點は三昧であり、魚釣りにも三昧があり、妄想も三昧なら、幻覺も一種です。斯くして三昧には無數あるが今吾々の謂ふ三昧とは法然上人の所謂念佛三昧である。

□ 純金はどこまでも純金です、鍍金は矢張り鍍金に過ぎません、信仰にも俄か塗りの似而偽物があります。眞の獲信は一朝一夕には得られません。仲々の努力の要る難中の至難なものであります。三昧を發得して無生忍を得れば法報應の三身も、總ての事皆な明瞭に解ります。たより無い口から出まかせのお話でなく、眞實の眞理として領かれるのであります、眞理の光明は永遠不滅です、そしてそれを實證し得た者の内情は筆を以ても言を以ても語り盡す事は出来ません。

懺悔錄 (十六)

演 阿彌

智慧は直に私の上への御慈悲であり給ふなつかしい如來様よ。私は入信の第一歩に於て私の改造に關する數多の事柄が發見せらるゝと同時に私の惡習慣が如何に粘り強い物であるかが、益々ハツキリと判つて參りました。無論私には私の改造は出来ません。夫は唯だ如來様の靈化に依つてのみ興へらるゝ處の物であり、隨つて私は是非共宛かも秋の梢が霜露に依つて段々色濃く成り行く様に如來様への南無の念を益々深く強めて行かねばならぬので御座います。さもなくば寧ろ絶望であります。唯有一乘法無二亦無三。嗚呼本當に如來様よ。アナタの大御心が法藏菩薩を通じて此一乗の法を私達に示めされたと事ふ事は本當に不可思議不可稱として心から仰がざるを得ません。一度思ひを茲に致せば自から涙のにじむのを覺えます。噫々今幸にして此法味を味ひ而かも夫が直に

私の日常生活が價值を産み出す事の源泉である事を臆氣にも知り得て本當に歡喜したので御座います。然るに何うした事なのでせう。日が過ぐるに連れて私の夫は段々に退化して行くので御座います。かうして仕事して居る時は絶え間なく如來様が慕はれるにも係らずいざ佛前に据ると昨日より今日今日より明日と段々に南無の心が亂れて行く此事實は實に私に取つて悲しい悲しい事で御座います。私は何處に歎いた事でせう。何處に悲んだ事でせう。其内に御盆は來て忙がしくはなる。多くの人は遣は寄り集つて私の心を濁らしめんとする。かうして毎日毎日淋しい淋しい惱みの日斗りが續くのでした。併し淋しければ淋しい程惱めは惱む程一方に戀心は募り行く事も事實ではありませんでした。其歎きの中、夫は丁度盆の了る日の十九日に不意に上人が御尋ね下さいまして

「之から伊勢のY市へ行くのですが、其近所の某海岸で別時が開かれる都合もついて居るから、如何です繰合して一所に行きませう。然し場合に依ると別時の方は唐澤になるかも知れません。夫は

Y市へ行つてから確定せらるゝ事と思ひます。」
噫、適當なる時適當なる手段を如來様の方で考へて居て下さつたのでした。私は一切を打ち捨て、御伴する事を即座に御願ひいたしました。幸ひM夫人も御同道すると云ふので、信仰の初旅としては賑かに而かも榮光に充ちた「恵み」其物に外なりませんでした。其日からさすがの私の喫煙癖もサツバリと清められました。然し夫は何でもない事です。咽喉三寸の刺激に自分自身を誤魔化されまゝいと唯だ一度考へさへすれば直ちに問題は解決されまゝです。偕て其日は途中N市のG寺へ一寸立寄り夕方目的地なるY市へ参りました。停車場へ迎へに出られて二三十人の方々の間に交つて寺へ赴く途中も希望に充ちたる私は心私かに
「此地に於ける三日間を眞劍にならしめ給へ、」と頼りに祈られたのでした。法の友として懐しいU様K様N様や舊友のT兄Y兄新知のO様K様N様I様T様などの其眞劍の御姿を拜するにつけ私も増々熱心にならざるを得ませんでした。翌日は又もU様と隣合せて一生懸命に御念佛致しました

が偕て何う云ふ物かサツバリ心が落付きません。題目式の木魚、アクセントの違ふ念佛、どうも其方に斗り注意が向けられて、我乍ら我身の腑甲斐無さを悲みました。然し此處は熱心な信仰深い土地柄で青年の人々が續々質問せらるゝ事など羨ましい事です。かくて三日間は過ぎて仕舞ました。其日の午後漸く唐澤で別時する事に確定しましたので、此頃の不徹底を取り返し得可き豫想の下にどの位喜んだ事でしたか。廿四日M夫人と御別れしてN市のS寺に上人とU様と三人して参りました。上人は直に組合教會のK牧師に遇ひに行かれた跡でU様と一處にA様の御もてなしを喜んで暫くくつろぎましたが私は「三日間のY市の別時は有耶無耶に過ぎて仕舞つたが偕て唐澤は……。」と前途が案じられるので御座います。全く思ふ様にはならぬ有爲轉變の世に處する身の、眞實の理に體達せざる限り、終には絶望に了る可く余儀なくせらるゝのではあるまいかと思ふ念慮は、聖道化と一概に貶なす可き物でなくして、道を求むる者の誰でも一度は経験する處の心理ではあるまいか

と存じます。自分には力無き事實に明かなる事實です。如來様に依つてのみ可能である事も解つて居ります。併し私達は今直に徹底したいのです。私自身に出來得ない事が明了なる丈夫れ丈猶更に待遠い事では困るのです。茲に如何しても如來様への祈りが益々深刻にならねばならぬので御座いました。翌朝は暗い内から御念佛が初りました。私は寧ろ悲痛の心で一心に如來様へ祈りました。唯だ「悲痛なる祈」と云ふ物がある丈で其處には私と云ふ者はありません。「悲痛なる祈」其物が私であつたので御座います。今になつて考へますと其時程の嚴肅で敬虔に充ちた御念佛は前後になかつたと思ひます。實に痛切な命懸けの物でした。朝食の時上人が「今朝の御念佛にあなたはスツカリ如來様に成り切つて居ましたよ。」と云はれましたが悲痛に結ばれて居る心はそれでも解けませんでした。私は唯だ悲しく「唐澤で。唐澤で。」と操返へすのみで御座います。翌廿六日は待ちに待たれた唐澤への旅立が恵れました。私はまあ八時間の汽車の中でどの位祈つた事でせう。

「嗚呼。如來様よ。嗚呼如來様よ。」
再び群り起る戀慕の心！。幾度湧上る欣慕の心！
「あゝ如來様よ。あゝ如來様よ。」
幾度、涙と共に祈られた事でせう。透き通る碧空を眺め乍ら。鬱葱たる山岳に見入り乍ら。
上諏訪に着くとM上人や四五の方々を迎へて下され而して湖畔の或温泉に導かれて暫く暑さを忘れましたが、U様と私とは先發として一足先に出掛る事になり途中U様の理髪の間を路傍に佇み乍ら二三手紙を認めました。手荷物に御寺へ御願ひしたのであへざあへぎの坂道とは云へ、昨年よりは幾層倍か樂で御座います。坂道を半ば登ると一層痛切に前途の希望が思はれるのでした。
「是非徹底したい物だな。然し。期待すると何時も失敗なのだから、まあ餘り自分を考へまい。然し望みを望まれぬ事程つらい遣瀧無い物はない。嗚呼。本當に……。」思ひは同じU様も
「今度は何か一變化がある様に思へてならない。だが此奴を一つ打破らねば……。」
と獨言を言つて居られました。

御寺へ着くと直ぐ道場を拵へました。去年の經驗があるから雑作はありません。私達は御先に御飯を頂いて夕月淡き湖面を眺めて居ると、三々五々元氣の好い兄弟達の姿が見え初めました。待貫けられた夕食が濟むと一同は道場に入つて籤引で席を定め暫く御念佛を致しました。私も一心に此一週間の御恩寵を祈つて居りますと、不圖左手の甲がピヤツとしたので見ると一滴の血沙が生々と附いて居るのでした。

「何處から飛んで來た血だらう。……。」

私の口から出たのかと思ふと胸騒ぎが致します。

「私は死ぬのでは無いか知ら。此一週間の間に死ぬのだから知れぬ。何だか厭な厭な氣持がする。氣の遠くなる様な變な氣持がする。噫。厭な氣分だ。然し今死ぬのは厭だ。今死んではならない。不徹底の儘で死んではならない。けれど噫々何となく死ぬ様な氣がする。何となく死が豫想せられる。何うした事なのだらう。……。」

餘りに氣分が悪いので用意の仁丹を拾五六粒呑み一心に如來様を念じて居ると大分氣分も癒つて

參りました。上人は挨拶を兼ねて明日からの覺悟

を今宵登山し乍らの月に就ての感想を例に引いてかなり深刻に吾々の求道心に向つて訴へられましたが、其視察の鋭さには敬服せざるを得ません。庫裡に下がると上人は二三の方達と椽側に立つて高山の月を賞して居られました。私は傍に摺寄つて「唯今の御念佛中に急に死んで行く様な氣分になりました。何となく死が思はれてなりません。死相が顯はれて居りはせぬか見て下さい。」

上人はじつと私の顔を見つめて居られました。「死相は少しもない。心配は入りませぬよ。御覽なさい。いい月ですね。下へ少し降りませう。」

と椽側から下駄をはかれて本堂の方に行かれますので私も其跡に従ひました。皎々たる月は海拔三千尺の濁らぬ空氣に洗はれて清く而も神秘に私達二人を隅なく照らして居ります。

「どうです。美しい月ですね。然し何麼に思ひますか。今月今夜茲で二人で此月を眺めて居る此事實が前から豫想せられて居たでせうか。」

「……………」

「信仰も亦た此通りです。私達自らには豫想され

ない物ですよ。」まあ何と云ふ大きな暗示をよくだ言葉でせう。私は唯だ識空處の人の如き無識清澄の法悦を味ふのみで無言に頷くので御座いました。

借金してる心持 (四)

中 野 尅 子

主「私は私の借金を友達が立替へて置いて呉れたと知ても、付うも悉皆り身輕になつた様な氣がせなかつた、何だかまだ借りてる様で付うも濟まぬ氣がする、何とかして感謝の意を十分表せなくては氣懸りである。否やどんなに感謝報恩を以てしても一度自分に受けた負目は永久解けぬものである。とより信せられなかつた。即ち私は永久に借金してゆく者であり、私の罪は永久に滅びる時なく、何人の存意、何人の代償でも終に消える時がなく、救はれると赦されるとに係らず一度受けた借金の汚名は永久に不滅である。私自身の重荷で

あると深く悲まれた。

此點に於て君の安ばく救はれた宥されたと云て空騒ぎしてる奴等の氣が知れぬと云ふ心持と大に共鳴する處がある。一體吾々の様な理窟屋には代償説とか贖罪とか云ふ事は信せられにくひ、イエスが地上一切の人間に代て其罪を自らに負ひ十字架に就いたから、我々の罪も淨まつたのだと云ふけれど私には付うも十字架の贖ひを信することが出来ぬ。釋尊が勤苦六年して眞に佛意に契ふ四諦十二因縁六度の法を開示して下さつたとは云へ、其儘自分に救はれの道とはならぬ。法然親鸞が三十年四十年と求めて念佛の一行よく往生不退を得ると告げられても、それを眞似た丈けの一邊の念佛で助つた往生だと思へぬ。自ら十字架に就く事に因て初めてイエスの十字架が信せられ、本當に歸命の一念が出て初めて法然の心も親鸞の悦びも解る。それを初めから贖罪を信せよの念佛を申せのと謂はれても其氣にならぬ。況んや其贖物眞似丈けで糠悦びをして居れぬ。即ちイエスや釋尊に委かして手ぶらで我借金濟めりとしてゐれぬ。か

と云ふて自己相を終始凝視して悲愴に疲れてゐるばかりが忠實に人生を渡るものでもない。

此借金を返すにかして返へしたいものだと言に心懸けてゐてこそ、正直な債金者だ、返へしたい返へしたいと念頭に忘れぬ間こそ眞人間で勤儉謙抑である。返したいと思つて返へせぬ間が本當に返へしてゐるのであり、假令少しの金でも返へしたから是れで何の恩恵があると傲嬌を極め込んだ時、返へして然かも本當に返へして居らぬのである。金を返へしても尙全分を返へし切て居らぬと常に忘れぬ者にして初めて完全な返済者と云へる。そう云ふ志の者を見込んで貸した者も敢へて返金して貰はうとは思はぬ程満足を感じてゐる、此れに反して假令金は返へして寄こしても何時金を借りたと云ふ様な高慢ちきな顔をしてゐる奴には餘り良い氣は起らぬ。神も一切の人々から罪の支拂を受け様とて待てゐるものではない。又一切の者を罰してそれを潔よしとしてゐるものでもない。況やイエス一人の愛兒を標して喜び、他の總てが第二第三のイエスとして各々十字架に來ることを

飢を待てゐるものでもない、神の眼には世の人々の罪の穢れなんか問題でない、罪と見えても其罪を科める心すら無いのである。始めから一切を赦し一切を抱き取つて十字架道を隠してゐる。而し罪ありて罪なしと誇り、罪ありて忍許平然たる者には愛すればこそ正義の劍を奮て警策するのである。如來大悲の前には凡夫濁惡の機を問はず、有信無信、順信背信を論せず一様に遍照十方世界の救済の光明が涵がれてゐる、即ち知ると知らぬと喜ぶと呪ふとを問はず、總て救はれてゐるのであり宥されてゐるのである。我々が努めて善根を造つたからとて又惡業を積んだからと云ひ、それで救済の高に等差を生ずる様なそんな吝な佛の大悲心ではない、かと云ふて其れ程如來のみ心は廣大無邊だと聞いて此れ位はまだ大丈夫と借金造罪も恬として恥ぢぬ者には終に不動の利劍降らざるを得ぬ。此心眞に衆生の臭味を感れまはこそである。此借金返へさな措かぬと勤めて行た人にして初めて、其塵貸金受取らうとは思つて居らなんだと云ふ大悲勅命、十字架の救ひを聞く事が出来る、そし

眞の温かみは手安く得られものでない

課代拂込芳名

- 金五圓石原一郎様 ○金四圓久里濱長安寺様 ○壹圓藤村章子様 米田傳司様 熊野宗純様 新井田秀子様 ○六十錢高樹とら様

愛の園圖書館より

- 圖書寄贈 岩崎親雄氏 中村辨康氏
- 鬼頭長次郎氏 橋本定實氏 山方泰氏
- 寄贈 五圓國友喜寬氏 五圓石川新次郎氏 一圓池田喜市氏

て本當にみ親の心を感得し其寛大さに隨喜せざるを得ぬ、十惡愚痴の妄人救はる事無しと悲嘆の裏にも一向に歸命し得た者にして、惡人なるが故に喜べ我は汝等が爲めなりと本當の同情者、救主として如來は現前に在らず。一度此如來心を得て後自ら如來の靈化を被て自ら如來として立ち、如來道を顯現して行く處、向上門の念佛道がある、自己の罪惡甚重などを愚痴てゐるのでなく、其様なものであればこそ佛に引立てられて完全人格たらねばならんと自づと作益せられてゆく、即ち悲しみ乍らの悦びであり、永久の負債を背負ひ乍ら而かも身輕るに進撃せれる救済道である。救はれてゐると云ふのは蓮葉不悦びでない、此悲しみと悦びと即したところであり、大否定に即した大肯定である。

温泉地方で井戸を掘ると

先づ冷たい清水が湧いて來る

それを掘りぬくと

今度は熱い熱い湯が噴き騰つて來る

振替口座東京四七式八八番眞生社
大正十一年二月二日第三種郵便物認可
大正十二年七月一日發行毎月一回一日發行
定價一部十錢 半年六十錢一年一圓

編輯兼 發行所 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社
東京市神田區駿河臺袋町一番地

印刷所 原 子 廣 宣
東京市外西巢鴨町二七一二番地

印刷所 無我山房印刷工場
東京市外西巢鴨町二七一二番地

念佛三昧會

○時日 八月二日ヨリ七日間

○場所 信州上諏訪唐澤山阿彌陀寺

(汽車上諏訪驛下車)

○導師 土屋觀道師

○申込 唐澤山阿彌陀寺